

「さ」っくばらん対談



「チームワークよりも、一人ひとりの実力をつけることで、チームは強くなるんです」

「個性を見極めて、ふさわしいポジションにつけていく。それが大事なんですね」

東京大学工学部教授
東京大学野球部 部長

おがむら ほんめ
岡村 甫さん

なかむら ゆうじ
中村雄二

大成ロテック株 取締役社長

V S

東大野球部は基本的な技術はある。試合で実力が出せるように、が課題。

中村 東京六大学野球も春のシーズンが始まりましたが、昨年から東大の野球部部長になられてお忙しいでしょう。どうですか、今年の東大は。

岡村 監督が昨年から平野さんになりました、昨年一年間に基礎的なレベルはかなり上がったと思います。ただ、昨年までは、それが試合で発揮できるまでになっていなかったのですが、今年は試合で実力が発揮できるレベルまでいくんじゃないかと思っています。

昨年までは試合での実力が相手が七でうちが三の程度だった。それが今年は六対四にはなるでしょう。そして来年は五分五分にはなるのではないかと期待しています。

中村 そうなると試合運びのいかんで勝点をあげることができる……と。

岡村 非常に低いレベルからあるレベルまでは何でも急速に伸びるわけですから。そこから上に伸びるには基本的なところで間違っていないということが大切なので、間違っていない方向にいけばよい、と思っています。

中村 それは体力的に？技術的に？

岡村 技術的にです。たとえばバッテイングについて言えば打つ形が良くなってもまあまあ打てるんです。しかし、そこで止まるか、より成長していくか、その分岐点に今年の東大はさしかかる、ということですよ。ゴルフでも同じだと思いますが、スコアをまとめようとし過ぎると先で伸びなくなってしまう。練習場ではいい当たりをするけれども、グリーンに出ると調子がでないということ、よくありますよね。東大野球部は昨年まで、とにかく素人がうまくなっている段階でしたから。

中村 練習量はすごいというじゃないですか。

岡村 いや、量はそれ程ではないですね。常にもいい練習をしているとは思っています。試合前のフリーバッティングでは今、六大学の中ではいちばんいいバッティングをしていますよ。

中村 試合になるとそれがあまり発揮されない？（笑い）。

岡村 ええ。ですから、やさしいボールを思うように打つという段階。もう少し本当の実力がつけば、試合でも打てるようになる。レベルが低いところで試合で力を出そうとしすぎると、ワナにはまって頭打ちになってしまう。そこをうまく乗り越えることができるか

どうか、今年だと思っています。

中村 大いに希望が持てますね。

岡村 今年は春、秋とも各大学から勝点一ずつぐらいはとれるようになるかと考えているんですが（笑い）。

選手一人ひとりの

特性を見極めて

ふさわしいポジションに

はめていく

中村 学校教育、なかでもとくに小学校、中学校では全体的にレベルアップをするという考え方が強いですね。企業の教育は個性を伸ばすということ、一人ひとりに合わせた教育をするんです。大学の野球選手の場合はどうですか。

岡村 私、じつは東大の野球部の監督を二回やっているんです。一回目は二十四歳のとき。選手の中には同い年の人もいました。このときはうまくいかなかったんですが、そのあと十年後、三十四、五歳のときにもう一回。

二回目の監督のとき、今言われたことを感じましたね。野球では各ポジションに要求されるものが違います。サードはサードとして、ショートならショート、外野なら外野で、それぞれ要求されること、身につけていなければならぬ技術がある。ですから、選手の

力量を計測したんです。走るのが速いかどうか。これは走らせてタイムを計ればいい。肩がどれくらい強いのか。ボールを投げさせてみれば分かる。打つたらどのくらい飛ぶか、止まっているボールを思いっきり打たせてみる。そういうことをして、あとは体格をみれば大体、素質は分かります。体が大きくて足が遅い人は原則として一塁かサードに。そこで打てなければ試合に出る資格がない。足が早くて打てるのは外野手です。外野手は足が早くないと試合にでる資格がない。

中村 ジャイアンツの原辰徳選手なんかそうですね。ちつとも足は速くない……（笑い）。

岡村 ええ。ですから、彼を外野にもつてくるという発想は信じられませんが、私だと、原選手は一塁かサードで使えなければダメ。外野で使うという発想は東大の選手としても、ありえませんがね。

……というように、各ポジションにあった個性と技術をもった選手をはめていくんです。セカンド、ショートはとにかく守備で生きる。打つ方は気に

岡村教授 のプロフィール

1938年、高知県生まれ。土佐高校から'57年東大へ進学。高校時代から野球で活躍。東大野球部では、名ピッチャーとして高い評価を得た。'66年工学博士、工学部専任講師、'68年助教授、'82年に教授となる。ハイパフォーマンス・コンクリート等の研究ではわが国で第一人者として知られる。'91年から野球部部長となる。大成ロテック・中村社長とは大学の後輩にあたり、中村社長のお嬢さんの結婚式の仲人を務めた関係。



しない。要するに守備がうまい人の
から二人をセカンドとショートにす
る。キャッチャーは、盗塁を殺し、頭
はある程度よくないといけません。

ピッチャーは特異な才能、技術でし
て、体格に関わりなく、打てない球を
投げるピッチャーがいい。当たり前の
ことですが、打てない球というのは、
いろいろな内容がありまして。(笑い)。
性格的といえますか。ピッチャーに適
した性格でないとうまくいかない。

中村 ピッチャーは、あまりおとなし
い人、気が弱い人はダメでしょ。

岡村 ピッチャーは一人で相手九人と
面と向かって対抗しますから。相手の
一人一人を自分でやつつけないといけ
ない。それだけの気力がないとでも
やっつけていけません。ですから、気が弱
い人はとにかく、どのポジションにも向
かないんですが、とりわけピッチャー
には向かないですね。

中村 岡村先生は東大の現役時代、名
ピッチャーでならしておられたわけが
すけど、四年間で十八勝したんでしたか。

岡村 いや、十七勝でした。私が投げ
た試合では四点以上とつた試合が十回
ほどあるんですが、そのうちの九回勝
っているんです。これが私が勝数の多
い理由ですね。

中村 ほとんど連投、連投ですか、そ
のころは。

岡村 一シーズンに少なくて十二試
合、多い時で十六試合あったんですが、
私が出ない試合はひとつか二つでした。

中村 何ともないもんですか。腕は。

岡村 いや、四年生の時は、朝起きた
ら肘が曲がっていると伸びない。伸び
ていると曲がらない。という状態でした。
そこだけ組織が死んでいて血が通って
いないんです。だから昼ごろまで冷た
いんですよ。結局練習し過ぎなんです。

中村 今は後遺症はないですか。

岡村 今は全然ありませんね。

チームワークよりも、 個々の実力の向上が 大事なんです。

中村 ところで、野球というとチーム
ワークが大事だと言われるもんです。

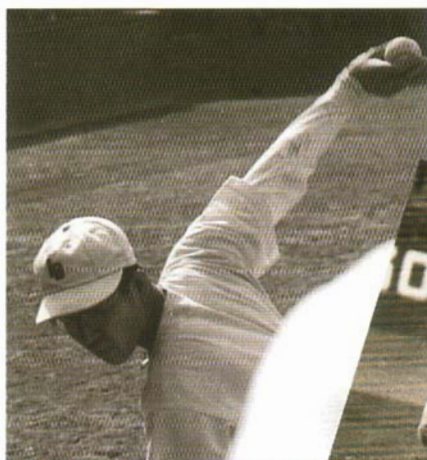
会社の組織もそれが大事だと思ってい
ますが、監督を経験されてみて、どんな
お考えですか。

岡村 会社の組織は私よく分かりませ
んが、野球にはチームワークは要らな
いと私はよく言っています。チームワ
ークよりも、技術的なレベルアップが
大事だ、と。

どういふことかと言いますと、たと



◀大学4年のとき



▼大学3年のとき



25歳で監督を務めていたころ(左
端)背広姿は当時の国分野球部長
(現・名誉教授)

岡村教授 東京大学野球部選手・監督時代

ざっくばらん対談

中村社長のプロフィール

1927年東京都生まれ。'50年東京大学第二工学部土木工学科卒業後、大成建設入社'75年横浜支店営業部長。その後同支店土木部長、新潟支店長を経て'83年取締役土木本部土木部長のち'85年常務取締役、'87年専務取締役、'89年副社長、'90年副社長営業総合本部副総長兼本部長。'91年大成道路社長に就任。



えはショートにゴロが来た。セカンドとショートでダブルプレーをするという場合、ショートはセカンドが一塁に投げやすいところに投げるのが技術なんです。それをきちっとやってくれればいい。二人がいくらか仲が悪くてもそれさえ確実にやってくれたら一塁はアウトにできる。ところが、仲が悪くてもそれができなかったらチームは勝てないわけです(笑い)。

だからチームワークなんてごちゃごちゃ言わずにチームとして必要な技術をきっちり身につけて欲しい。そうすればチームは勝てるんです。それをやらないで、仲よくなるために、一緒に酒を飲むとか、遊びに行くとかを

いくらやっても意味がない。仲が悪くてもいいんです、各自がやるべきことをきちんとできるように鍛練してほしい、と。

中村 なるほど。会社のそれぞれの組織が強くなるためにも、同様のことが言えますね。

上に立つ人は、自分が進歩して言うことが違うようではダメです。

岡村 もうひとつ言いますとね、多分社長と監督というのは似たようなところがあると思うんですが、監督が進歩してはダメなんですか。

岡村 先ほども言いましたように、私が初めて監督をやったのは二十四歳の時でした。監督というのはご存じのように大変な権限があるわけです。従って監督がどういう方針でやっていくかというのはそのチームにとって、選手個々にとつてすごく重要になってきます。ところが、初めて監督をやるものだから、監督として日々、進歩していくわけですよ、勉強もするわけですから。そうすると、少しずつ言うことがよくなっていくんです。これがよくない(笑い)。

選手としては毎日監督の言うことが変わるわけですから、そんなもの放っておいて勝手にやるしかない。ですから、非常に変な話ですけど、上に立つ人は要するに進歩してはいけない。変わってはいけないんです。方針が変わるんだったら人が変わるしかない。あの長島監督が失敗したのは、日々彼が監督として進歩したからなんですよ。

中村 もう一度やれば、いいかもしれないですね(笑い)。それはともかく、最近世の中の変化が激しくて、会社の経営も変化というか、朝令暮改もやむを得ないというかそういう風潮は全体にありますよ(笑い)。

岡村 それだとやはり、社長交代ですね(笑い)。

中村 ところで、ごらんのように、当社はこの四月から、社名を「大成ロテック」と変えました。大成道路と名乗っている、道路しかやらない会社かと思われまして、『ロテック』というのは「ロード」と「テクノロジー」を合成したんですが。

岡村 なるほど。やってきたことが、社名を超えましたというんですか。将来またこれを変えなくてはいけない時がきたら、変えるかもしれない……。

中村 これまでの社名で三十年やってきましたから、また三十年もたつたら変える、それはあり得るかもしれません。時代に応じて、ですね。

岡村 そうですね。それは大変いいことかもしれませんね。

中村 先生のご専門のハイパフォーマンス・コンクリートなどのお話も聞きたいんですが、長くなりますのでまた機会がありましたらということですね。本日はお忙しいところ、本当にありがとうございます。東大野球部の健康を祈っております。